

自然はそんなにヤワじゃない

誤解だらけの生態系



タイトル 自然はそんなにヤワじゃない
—誤解だらけの生態系

著者 花里 孝幸

出版社 新潮選書 新潮社

発売日 2009年5月25日

ページ数 174p

筆者は信州大学山岳科学総合研究所の教授で、淡水プランクトン(ミジンコなど)の生態研究が専門です。

まえがきに、2008年9月、国の天然記念物の「トキ」10羽が佐渡に放された話が出てきます。1981年に野生の「トキ」がいなくなってから27年後のことです。この間、佐渡には「トキ」という生物種のいない生態系がつけられていたわけです。そこに「トキ」が放たれたというのです。

2009年3月1日、産経新聞に「放鳥トキが食べていた新種のカエル」と題された記事が載りました。希少種が希少種を餌にしていたというニュースです。そこで、訳知り顔の人に聞いてみると、「それはトキの心配をすべきで、カエルはいいよ」と冷たい返事が返ってきました。つまり、生物多様性保全のために生物を野外に放つと、新たな絶滅危惧種が生まれる可能性があるという話です。

生物多様性の問題でいつも疑問に思うのは、「トレードオフ」の問題に帰してしまうというジレンマです。

これと似たような話で、大雪山の「ウスバキチョウ」の話があります。この蝶は自分も天然記念物なのに、なんと天然記念物の高山植物の女王と言われてる「コマクサ」を食べています。天然記念物だから「ウスバキチョウ」は獲ってはならないというので、最近、「ウスバキチョウ」が増えてしまい、「コマクサ」がダメージを受けているのです。そして、「コマクサ」が減っているため「ウスバキチョウ」も減っているというわけです。この場合、増えすぎた「ウスバキチョウ」は人為的に間引けばいいのではないかと素人は思いますが、環境省は何も手を打っていないようです。本書ではこのことをどう考えているのでしょうか？興味津々で本書を開いてみました。

本書はわずか 175 ページなのでいちいちコメントを入れていくと本文をそのまま写しとることにもなりかねないのでざっとまとめてみました。

まず、第1章は「生物を差別する人間」です。「クジラだけがなぜ轟頂(ひいき)される」の項で、南氷洋での日本のクジラ調査船が妨害されるニュースから始まります。しかし、もし捕鯨を全面的に禁止したら、クジラの個体数が増え、オキアミの資源量が減る。オキアミを食べられなくなったクジラは魚を食べるようになり、魚の量が減る。そうすると、人間が利用している魚の量が減少し、海の魚に依存した人間社会の経済システムに大きな影響を与える。実際、太平洋沿岸域ではそこに生息するミンククジラが消費するカタクチイワシやサンマの量は、人間による漁獲量を超えているといえます。

すなわち、クジラの個体数や種組成を適正に管理しなければ、人間が一定の漁獲量を獲得することが難しくなり、人間社会に大きな影響が及ぶ可能性があるということです。単に「クジラがかわいそうだから」との理由でクジラを保護するのではなく、人間も地球の重要な一員となっている海洋生態系のバランスを考えながら、捕鯨を考える必要があるわけです。つまり、あるバランスを維持しながら水産資源を人間が利用するためには、海洋生物の現存量を把握することが重要で、そのために調査が必要となるのです。したがって、日本の調査捕鯨は意義ある行動だということです。

本章の最後に、「誰もが満足する環境はあり得ない」と述べています。すなわち、この章は生態学者の立場を明確にしておくための布石の章のようです。

第2章は、「生物多様性への誤解」です。ここで筆者は、多様な生物が生息することは良いことで、生物種数を減らす要因となる自然環境に負荷を与える人間活動は悪いことである。とおしなべて考えられるようになったように感じているとして、これについては筆者は、「私は、いささか危惧を覚える。そのわけをお話ししよう」と話を進めません。

本章は、筆者の得意分野だけあって、プランクトンを例にとり、生物多様性について縦横無尽に語ってくれます。

「プランクトンは殺虫剤にどう反応したか」、「大型種ほど殺虫剤に弱い」、「殺虫剤が生物多様性を上げる」、「汚れた湖の方が生物多様性は高い」、「洪水が河川の生物多様性を上げる」などは本書でもハイライト部分といってもよいでしょう。

「大型種ほど殺虫剤に弱い」では、「競争に強いものはストレスに弱い」と述べ、生態学的に考えると、競争にもストレスにも強い生物種がいたら、その種はオールマイティーな種であり、どんな環境でもその種が優占することになり、多様な生物群は作れないと指摘します。

第3章は、「人間によってつくられる生態系」です。ここでは、「温暖化で増える生物もいる」、「大きさの異なる生存戦略」では、生物個体群や群衆における様々な事象を数学を使って理論的に解析する「数理生態学」が出てきます。数学の好きな人は「r-戦略者」や「R-戦略者」などを楽しんでください。数学の苦手な人は数式だけを飛ばして読んでも理解に支障はありません。

その他、「人間の攪乱を喜ぶ生物」、等盛りたくさんです。

本章の終わりで、筆者は『生態系の良し悪しを考えると時には、「誰を中心にするのか」、「いつを基準にするのか」によって評価が大きく変わる』と議論をする時の基準についても述べています。

第4章は、「生態系は誰のためにあるのか」です。「地球に人間はいらない」という項では、人類がいなくなった後の地球を描く「アフター・デイズ」という映画の話が出てきます。人間が地球生態系を大きく変えて様々な環境問題を生んでいる。しかし、個々の生物種を考慮せず、生態系全体を一つの生命体のように考えてみると、人間の働きなどは大したことはないのである。生態系は大変柔軟で、人間によって変えられた環境はいかようにも適応して、自らの姿を変える。そして、虎視眈々(こしたんたん)と人類が地球から立ち去るのを待っているように思えてくる。

生態系は、ある意味とても冷淡な存在かも知れない。現在の生態系に適応できなくなった生物種は、容赦なく切り捨てられる。勿論人類も例外ではない。したがって、我々は、人類が地球生態系から見放されないように努力しなければならない。

我々は、「生態系保全」という表現を使っているが、これは壊れやすい地球生態系を守るということではなくて、人類が生態系からはじき出されないようにするということなのだということです。

本書で筆者が一番言いたかったのは、「アフター・デイズ」の最後の言葉、「地球には人間はいらない。だが、人間には地球が必要だ」ではないでしょうか。

生態系保全では、そこに生息する生物のことを考慮するけれども、生態系を構成する全ての生き物を等しく扱うことは出来ない。なぜなら、一部の生物を守ろうとすると、必ず不利益を被る生物が生じるからである。すなわち、我々人間が何をしようと、生態系を保全する目的で、何らかの活動をするということは、一部の生物種に利益を与えるということになり必然的にトレードオフの問題が生ずるのです。

本書は、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の開催の1年前に出版されたものですが、人間が自然に対して持つべき視点を判りやすく教えてください。すなわち、「自分の生態系に対する見方を疑ってみよう、自然を守ろうという自分が持っている自然感には偏り(かたより)があることに気付こう」と筆者は言います。つまり、ご

都合主義に陥っている私たちの生態系に対する考え方に異議を唱えているのです。さらに筆者は、人類が生き残るためには、生物多様性を心配するよりも、公平な生態系感を確立することが大切だと言っています。

本書は、我々が自己矛盾に陥っている生態系感をうまく並べなおすことが出来るように易しく指南してくれる本です。「自分の考えをまとめてみよう。もうちょっと深く考えてみよう」という人にはお勧めです。ページ数も 175 ページと少なく、誰でも一気に読める良書です。

2011. 3. 23
